

木造梵天・帝釈天立像 国宝

鎌倉時代（1185～1333年）につくられた、美しい仕上がりの寄せ木造りの彫像で、梵天と帝釈天を表している。梵天と帝釈天はもともとヒンドゥー教の神であったが、復活（転生）を司る神として仏教に取り入れられた。蓮の花を持っている梵天は、天上の神ブラーマに基づいている。帝釈天は、鎧を身にまとい、巻物を持っているが、これは天界と稲妻と戦いの神インドラを元になっている。

これらの像は13世紀初頭に日本でつくられたもので、12世紀（宋王朝）の中国の様式を模倣している。このことは、上向きに反り上がった靴のつま先や、衣の波形のひだなどに見て取ることができる。これらの像はもともとは興福寺の西金堂に、本尊の釈迦牟尼仏陀の像とともに祀られていたものである。